

にみえる。天守台跡には「独眼竜政宗」の石像、そのそばに有名な土井晩翠の「荒城の月」の詩碑がある。

「青葉城の造営と城下町の創設」

・国分氏の旧千代城跡に60万石にふさわしい居城を構え、城下町仙台を創設したのが伊達政宗である。これよりさき政宗は岩出山(玉造郡)に本拠を定めていたが、関が原合戦のち藩額も確定したのを機に青葉山に本城を移し、1601年(慶長6)から工事を始め、3年後の1604年(慶長9)、居城も市街の町割もほぼ完成した。その後忠宗が二の丸を増築し以来270年伊達家の居城となった。

・青葉城は前面に広瀬川を控え、三面を深山と峡谷でとりかこまれた要害堅固の山城であった。しかし政宗は城に天守閣を置かず代わりに大広間に建て、太平の治城たる性格を明らかにした。また城下町を広瀬川の左岸に建設し、町と城とを結ぶ地点に大橋を架設した。城下の町割りの基線は大手前から東方を見通した大町と、大町の中央でこれと直交する南町、国分寺の線である。この両線を基準にほぼ碁盤の目状に町々が割り出された。

仙台の城下町の町割りは武家町・足軽町・町人町・職人町・寺町・門前町などに分かれていた。武家町は城に近い川内・中島丁・片平丁などに大身武士の屋敷があり、番士以上は東北部に居住し、その町を東何番丁・北何番丁と数字を入れて呼んだ。なお武家町は「丁」と称し、それ以外の町と区別した。

・町人町はほぼ市街の中央に位し、開府当時は大町・肴町・南町・立町・柳町(本柳町)、荒町(本荒町)、材木町(本材木町)・北目町・二日町・染師町(本染師町)・田町・日形町(新伝馬町)・鍛冶町(元鍛冶町)の町が置かれた。そのうち大町・肴町・南町・立町・柳町・荒町の六町は米沢以来伊達氏と行動を共にした「伊達御供」の町人が居住し、御譜代町と呼ばれた。職人町・寺町は市街の周辺にあり、足軽・下級武士もそれぞれ集团的に居住した。

・門前町は東照宮・大崎八幡・亀岡八幡の宮前に発達し宮町・八幡町・亀岡町と呼ばれた。市中には広瀬川の水をひいた四谷堰が流れていた。武家町や寺町には立木が多くいわゆる「杜の都」の景観を呈し、城下町らしいおちつきを示していた。

○多賀城跡

都から遠く離れたこの地方は、蝦夷の天下であったが、大化の改新頃から大和朝廷の勢力は関東から越後の線まで進出しており、海道には菊多の関、山道には白河の関がおかれていた。そ

の後日本海側には^{ぬたり}淨足の柵(647年・信濃川の川口)と磐船の柵(648年・越後と出羽の境)がおかれた。この停足の柵に越後・信濃の民を移して柵戸をおき蝦夷に対する策源地とした。

658年には阿倍比羅夫が水軍を率いて東征を行ない秋田は能代方面の蝦夷を征服し、従来国造の支配下で半独立の形をとっていた陸奥に次々と郡が設置された。その一つが多賀城である。多賀城は陸奥支配の根拠地とされ東北開発の軍事的・政治的一大拠点となった。

この多賀城は724年に按察使兼鎮守府將軍大野東人により築かれたもので城といっても城郭とはちがい一種の砦である。仙台平野の北端の10m程の台地に設けられ、内郭と外郭とから成っている。中央の1辺100米位の方形に土塁をめぐらした内郭と東西約900米・南北約1100米の外郭とからつくられている。内郭の中央部には巨大な礎石が残っており、ここが鎮守府や国府の官衙のあった跡である。南門跡、東門跡も残り南門の東寄りに多賀城碑がある。この碑は日本の三古碑の一つとして著名で、

多賀城、志京一千五百里、去蝦夷国界一百廿里、去常陸国界四百十二里、去下野国界二百七十四里、去^{みづ}碓国界三千里

とあり、都からはるかこの地まで派遣された人々の感傷がしのばれる。

780年・律令体制が動揺した頃、蝦夷の豪族伊治峯麻呂が反乱を起こして多賀城へ攻め入り城はもろくも陥ちてしまった。朝廷は多賀城を回収し、鎮圧するよう命じたが実現できないうちに桓武天皇の即位となった。

都が平安京に移されるとともに兵制にも大きな変革が起った。それまでの兵制は今の規定にもとずいた徴兵制であり兵士は庸調を納め、兵器食糧を自分でまかなわなければならない為、訓練の時間もなく兵器も不完全であった。そこで桓武天皇は「健児」の制をつくり、郡司の子弟を専業の兵士とした。

そして、六万石の兵糧と五万余の兵を多賀城に集め788年より蝦夷征伐が行われたが、その第1回は失敗に終わった。そこでさらに大規模な計画で790年より第2回の征伐が行われた。この時は坂上田村麻呂が副使として参加した。797年には田村麻呂が征夷大將軍に任ぜられ、3回目の蝦夷征伐が行われた。

そしてその年の中に蝦夷の本拠であった胆沢城を陥し入れて京都へ引き上げた。

翌年798年、朝廷は田村麻呂に命じて胆沢城を築かせて鎮守府を多賀城からここに移し、蝦夷経略の基地が一步前進となったのである。

○瑞巖寺

828年(天長5年)慈覚大師が比叡山山王権現のみこしを奉じ天台宗の寺として建てたのが初めて青竜山延福寺と号していた。また松島寺とも云った。後に執権北条時頼は奥州を巡歴した時、ここで修禅していた法身禅師に会いこれを同山の住持とし寺号を円福寺と改め同時に天台宗より臨済宗と宗旨を変える大改革をおこなった。なお天台宗時代に僧が修業した洞窟山門前にたくさん並んでいる。以後ここは東北における臨済宗の拠点となった。

伊達氏がこの地を領するようになると政宗は再興を志して高野山から良材を運びせ4ヶ年かかって1609年落成しいらい伊達家の菩提寺として繁栄した。瑞巖寺は大崎八幡とともに桃山時代の建築様式構造を伝えるものとして貴重な建造物である。

〔国宝〕 本堂、庫裡及び廊下

〔重要文化財〕 御成門・中門

本堂は単層、入母屋造り本瓦葺、書院造り方丈造りの典型を成す。なかでも乙字型の平面図をなしている本堂玄関は武家の折中門おりの風を伝えるもので日本唯一のこの種プランの遺構として多高い。

庫裏は若干の部屋を除いて大半が土間と板の間で、この部分は天井を張らない。屋根は上に入母屋の煙出しをのせた大きな切妻造りで妻入りとなる。妻飾りは梁と束とで組み上げ海老虹梁で化粧母屋をつなぐ等、禅宗庫裏の代表的な形態を示している。ふすまや壁の絵は狩野法眼、山楽その他巨匠の名筆として知られまた格天井の絵や左甚五郎作と伝えられ「竹に虎」「松に仙人」「ぶどうにりす」の欄間の彫刻等があり、桃山美術の特徴としての豪壮さ華麗さを極めている。

○五 大 堂

海岸広場の東端、瑞巖寺の東南500mの老松茂る五大堂島にあって、小橋につづいて2つのすかし橋がかかって陸地に連なっている。大同2年(807)坂上田村麻呂が東征の時建てた。毘沙門堂の跡で慈覚大師が瑞巖寺の前身である延福寺を建てる時五大明王を安置してから五大堂と呼ばれるようになった。今の堂は政宗が慶長5年瑞巖寺を再建した時修葺した単層宝形造本瓦葺、三間三間の堂宇で良く周囲の景勝と調和して松島海岸指折りの景勝地となっている。なお方向に合わせて建物のまわりに十二支の動物が彫刻されている。

○観瀾亭

松島海岸の西、月見崎の小丘上に木羽こぼぶき、梁間5間桁行8間半の建物が建っている。この小亭はもと伏見桃山城内にあったが、伊達政宗が豊臣秀吉から拝領、江戸の藩邸に留置しておいたのを、二代藩主忠宗が海路運送してここに建造した。観瀾亭の号は五代藩主吉村の命名である。内部の障壁画は狩野山楽の筆、海に面した広縁からながめる松島の風光は詩的である。

桃山時代は各地の大名によって城郭造営と城下町経営が進められ、また社寺の再興や造営がさかんであった。政宗が青葉城とともに大崎八幡の社殿や瑞巖寺の伽藍を建立したのもその一例である。そのためには地方の工匠だけでなく山城や紀伊からもすぐれた技術者を招いている。したがってここ瑞巖寺の本堂でも近畿地方の桃山建築に劣らない豪華さが見られるのである。

青葉城、宮城野、松島に関する文学作品

青 葉 城

土 井 晩 翠

1871~1952

秋はうつろふ樹々の色に
名のみなりけり青葉山
となん
図南の翼風弱く
恨は永く名は高き
君が城あと今いかに。

弦月落ちて宵暗の
星影凄し広瀬川
恨むか咽ぶ音寒く
川波たちて小夜更けて
秋も流れむ水遠く

~「天地有情」より